

～ そよ風気分の城下町 ～

丸亀うちわ

国の伝統的工芸品



経済産業大臣指定伝統的工芸品

江戸初期に盛んになった丸亀のう

ちわづくりは、代表的な地場産業として発展を続け、現在の生産量は年間約一億本、全国シェアの約九〇%を誇り、平成九年五月、国の伝統的工芸品に指定されました。

クーラーや扇風機の普及など生活様式の変化とともに。うちわの需要は、昭和三十年前後の最盛期に比べて減少しています。しかしながら、風情あふれるうちわは、日本の夏に欠かせない風物詩として、根強い人気を保っています。

◆武士の内職として普及

慶長五年（一六〇〇）、丸亀の旅僧が九州で一宿のお礼にうちわの製法を伝授したのが熊本来民うちわの始まりといわれているように、丸亀うちわの技術は、江

戸初期までにすでに確立していたものと考えられています。

その後、寛永十年（一六三三）、金毘羅大権現の別当、金光院住職宥暁が、金毘羅参りの土産物に、男竹丸柄で（金）印入りの洪うちわを考案し、天明年間（一七八一〜一七八八）には、丸亀京極藩士が豊前中津藩から女竹丸柄うちわの技術を習い、藩も藩士の内職に奨励したため、うちわづくりが急速に広がりました。江戸から帰国後も藩士たちはうちわづくりに励み、町民も技術を身につけ、代表的な地場産業に発展し、日本一のうちわ産地の基盤を築くことになりました。

天保年間（一八三〇〜一八四三）、丸亀港は金毘羅船の発着でにぎわい、土産物のうちわも飛ぶような売れ行きを見せていました。当時の丸亀港のにぎわいぶりは「金毘羅参詣客の洪水のため、乗船下船雑沓し、年寄、子供思うように船に乗れず……」と記録にあるほどで、安藤広

全国シェア90%を誇る地場産業

日本一の

国の伝統的工芸品

丸亀うちわ

◆平柄うちわの登場で大躍進

明治に入り、奈良うちわにならった男竹平柄うちわが塩屋町を中心に急速に普及しはじめます。現在、全国的に有名な丸亀うちわはこの男竹平柄うちわです。平柄うちわは丸柄に比べて製造が簡単で、大量生産にも適しているため、現在でも平柄が丸亀うちわの主流を占めています。

平柄うちわの導入で、大量生産がかなうようになったのに加え、大正初期には、脇竹次郎が骨の切り込みに使う「切り込み機」と広げた穂骨を左右から支える鎌を通す穴をあける「穴あけ機」を発明し、うちわづくりを容易なものにしました。しかも、これを独占することもなく、自由に使用を認めたため、生産量は飛躍的に増大し、全国生産の八〇〜九〇%を占めるようになり、日本一のうちわどころを形成し今日にいたっています。



女竹丸柄うちわ

男竹平柄うちわ

◆材料が近くで間に合う強み

ところで、丸亀のうちわづくりがここまで発展した理由の一つに、うちわの材料がすべて近くで間に合ったことが挙げられます。



丸亀城・内堀の歌碑

丸亀地方では「伊予竹に土佐紙貼りてあわ（阿波）ぐれば讃岐うちわで至極（四国）涼しい」と歌い継がれています。すなわち、竹は伊予（愛媛県）、紙は土佐（高知県）、ノリは阿波（徳島県）というように、材料はすべて近くに産地がありました。交通が不便だった江戸時代にはもちろん、現在でも材料が手近に求められることは、大きい強みになっています。うちわの町らしく、丸亀城の内堀のほとりに、この歌を刻んだ石碑もみられます。

重の版画「日本湊尽讃州丸亀」にも描かれています。このころ全国の人々が丸亀のうちわを土産に持ちかえり、名声はますます高まってきました。

江戸後期の安政年間（一八五四〜一八五九）には、生産量も増え、年間八十万本を数えるほどになっています。



安藤広重の版画

◆日本人には欠かせないうちわ

江戸初期からの長い伝統を持つ丸亀うちわも、最近の急激な生活様式の変化で、需要が減り、苦しい時期を迎えています。台所からはかまどや七輪が消え、夏に涼を取るにもエアコンの普及で、暮らしの中でうちわの必要性が乏しくなっています。

しかし、手づくりうちわの素朴な味わいは捨てがたい魅力があります。やはり、浴衣姿にはうちわが似合います。

全国に誇る地場産業のうちわを守るために、インテリアにも使えるデザインうちわや、民芸品としての高級うちわの開発など、さまざまな業界努力も続けられています。幸い、ゆとりと豊かさを求める生活ニーズの高まりとともに、伝統文化のよさを再認識する風潮も芽生え、うちわ業界にとっても明るい環境がきざし始めています。

「たたみと浴衣があるかぎり、日本人の暮らしからうちわは

なくならない」ともいわれます。

私たちが心から誇りに思える

丸亀うちわの名声復活が強く望まれています。



金毘羅洪うちわ





うちわがなくては、お城まつりも始まりません。



日本中を沸かせる甲子園の高校野球。応援の主役はいつも丸亀うちわです。



橋の欄干もうちわ、うちわ。街路灯にもうちわが見られます。



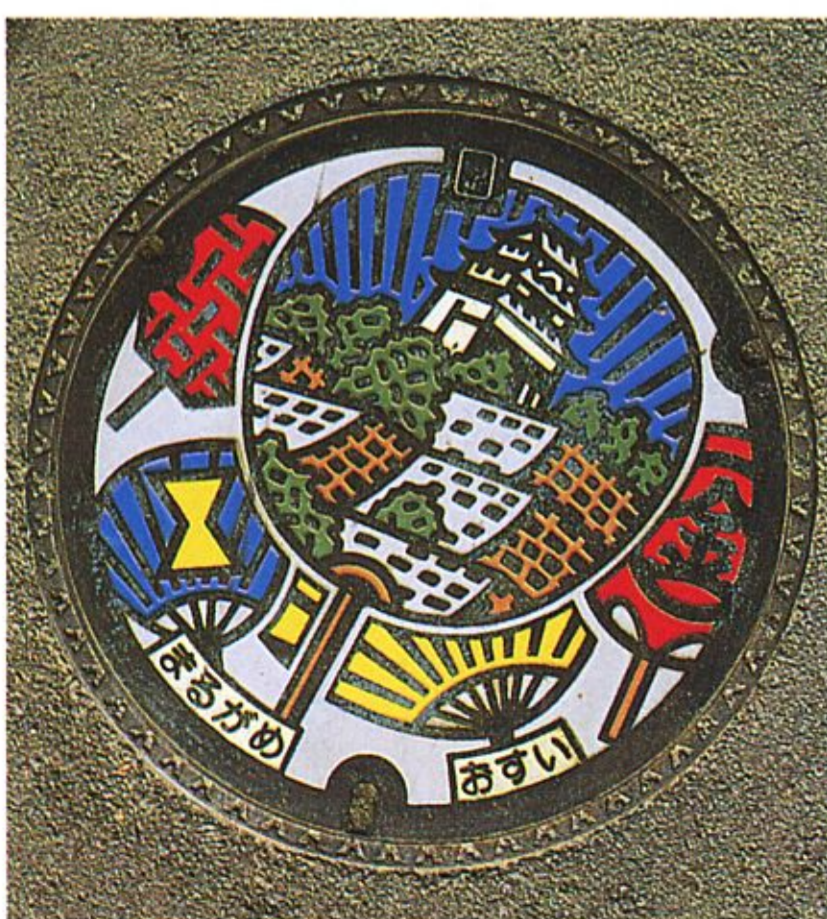
ごみ箱にまでうちわのデザインが光ります。



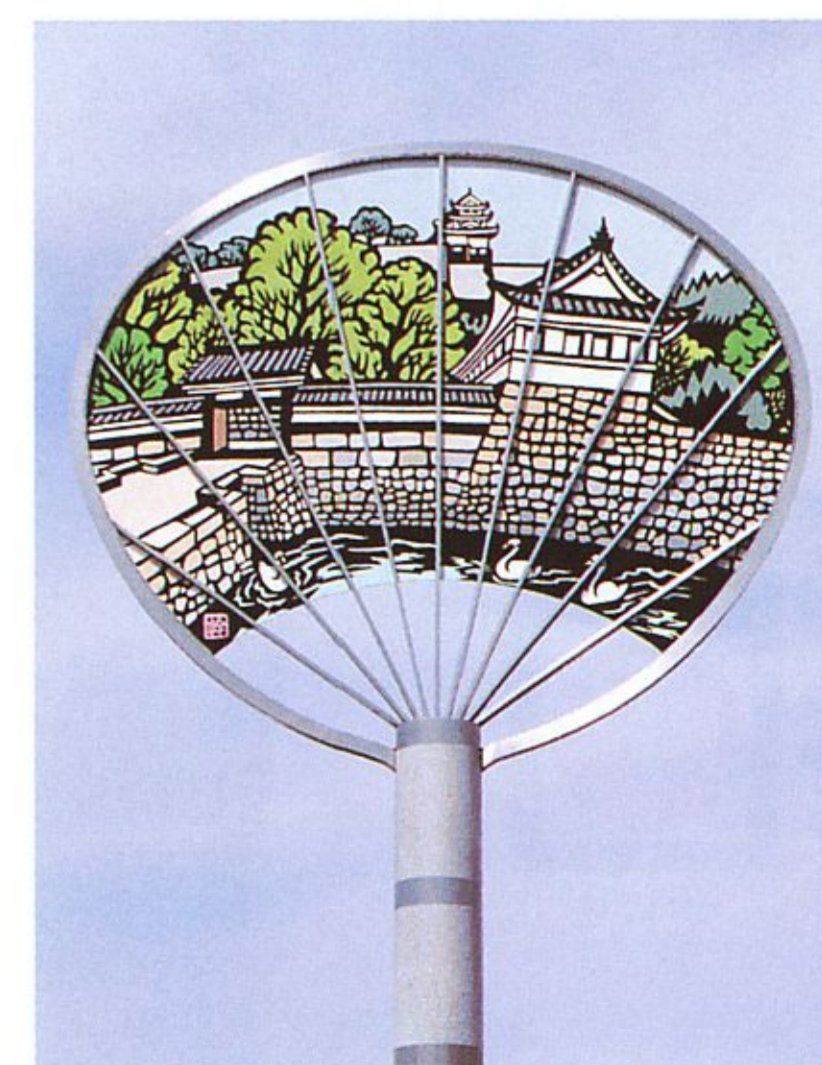
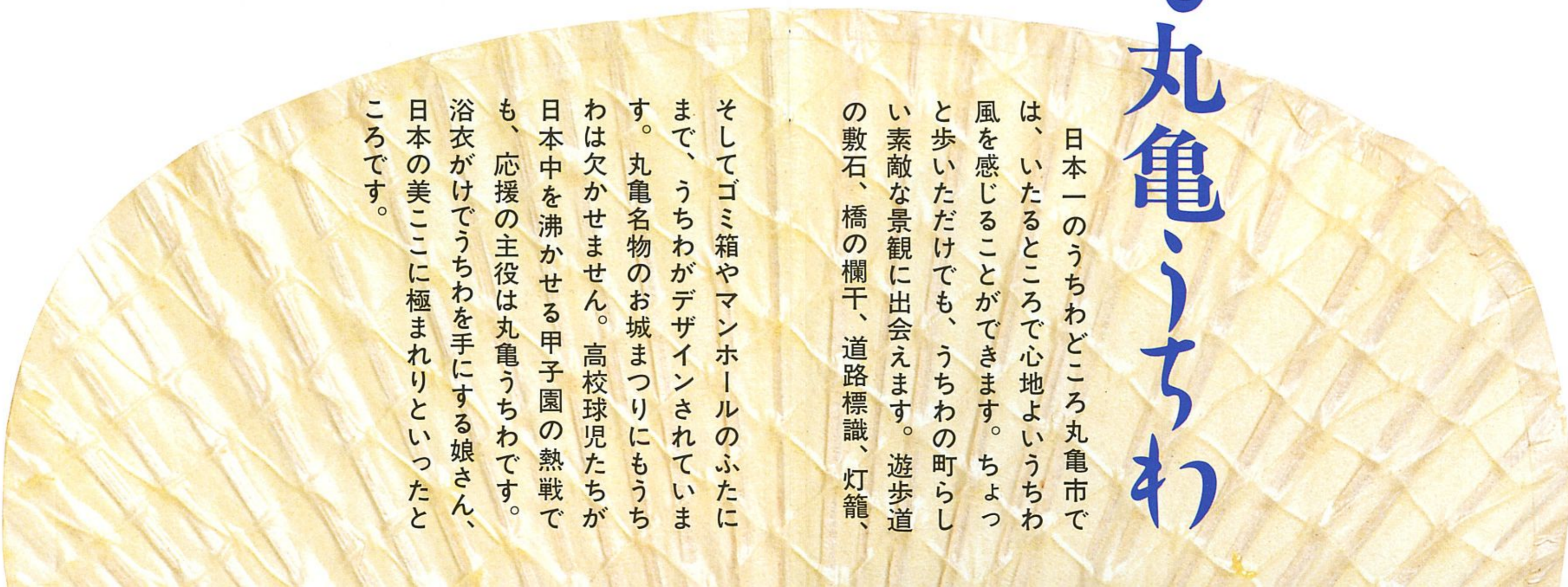
市民ひろばの遊歩道にもうちわのデザイン。



水際の木陰で涼をとるお嬢さんたち。浴衣姿にうちわは、日本の夏をしっとり彩ります。



マンホールにもカラフルなうちわのデザインが……。



ボルカ(うちわの港ミュージアム)の看板もうちわです。

割

削

挽

貼



しなやかに、そしてかたくなに

守りたい珠玉の伝統工芸

うちは丸亀市の代表的地場産業です。金印のうちは、以来、先人たちの努力の積み重ねと、職人さんたちの磨き抜いた技が、今日の名声を築いてきました。しなやかに、そしてかたくなに――。丸亀うちは、これからも確かな年輪を刻んでいくことでしょう。



経済産業大臣指定伝統的工芸品

◆瀬山登の功績と手腕

丸亀うちはが本格的に根づき始めたのは、金印のうちわからおよそ百五十年後の天明年間（一七八一～一七八八）のことです。そのころ、京極家江戸屋敷の藩士たちは、隣屋敷の豊前中津藩でうちわづくりを習い、内職に励みながら、江戸滞在中の小遣いや国表へ帰る時の土産代に充てていました。



瀬山登 像

時は流れて天保年間（一八三〇～一八四三）。丸亀藩家臣で江戸留守居役の瀬山登（二七八四～一八五三）は、藩の苦しい台所を救うため、うちわづくりを国元の

産業にと計画し、藩士たちに奨励しました。一人前になった者は国元へ帰して周囲の人に教えさせ、交代してきた者は中津藩邸で習わせるなど、うちはの技術者養成に努めました。

うちはの技術者が増え、生産が増加すると、瀬山は販路の開拓にも非凡な才能を発揮します。それが金毘羅船が着く丸亀港の整備です。福島港や新堀港が完成すると、全国から金毘羅参拝客が殺到し、丸亀の町はにぎわい、参拝客のほとんどが軽くて荷物にならない丸亀うちわを土産に持ちかえるようになりました。

こうして、うちわづくりは武士の内職から一般町民にまで広がり、幕末には八十万本を生産する産業に発展し、日本一の丸亀うちわの基礎を確立しました。

丸亀うちに著しい功績を残した瀬山登の像は、整備に尽力した丸亀港の太助灯籠の前に座り、城下町の繁栄と伝統工芸の行く末を見守っています。

◆職人たちの伝統の技と心意気

現在、丸亀うちはの八五％ほどをポリうちわが占めています。機械化で量産で

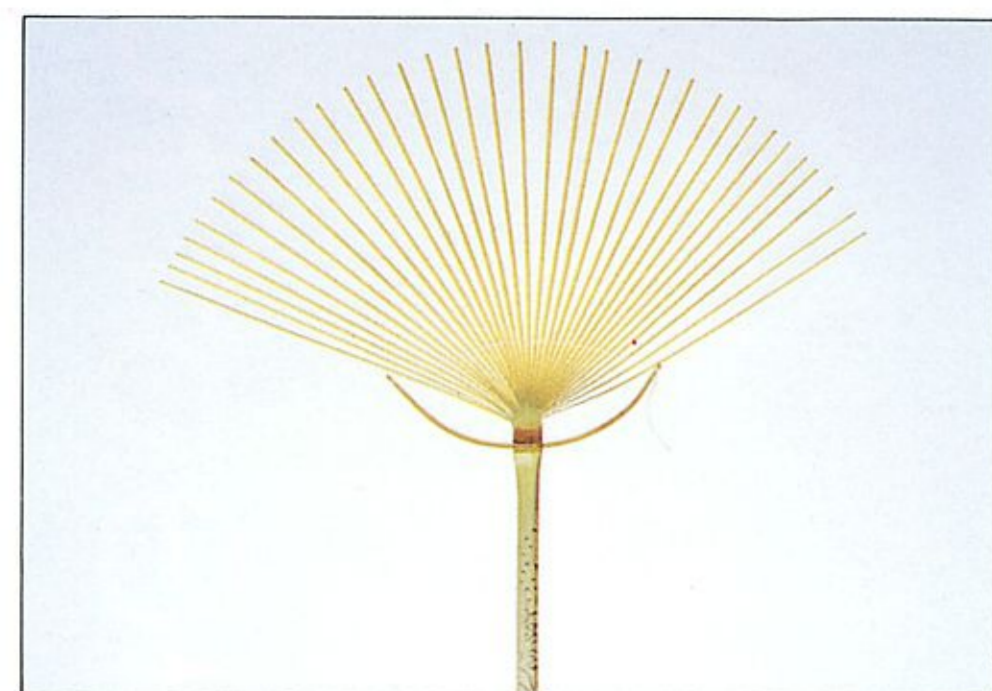
きることやコスト面を考えると、今後もポリうちわが主流になることは明らかです。しかし、ほとんど工程を手作業に頼る竹のうちわには、ポリうちわにはない温もりと気品があります。職人さんたちの鮮やかな手仕事、一本一本味わいの異なるうちわを生み出しています。そこには、日本一のうちわどころに生きる心意気があります。

高齢化や後継者不足の問題もありますが、国の伝統的工芸品に指定されたことで、業界も活気づいています。ふるさとに育った丸亀うちはは、末永く後世に伝えていきたい珠玉の伝統工芸です。



太助灯籠

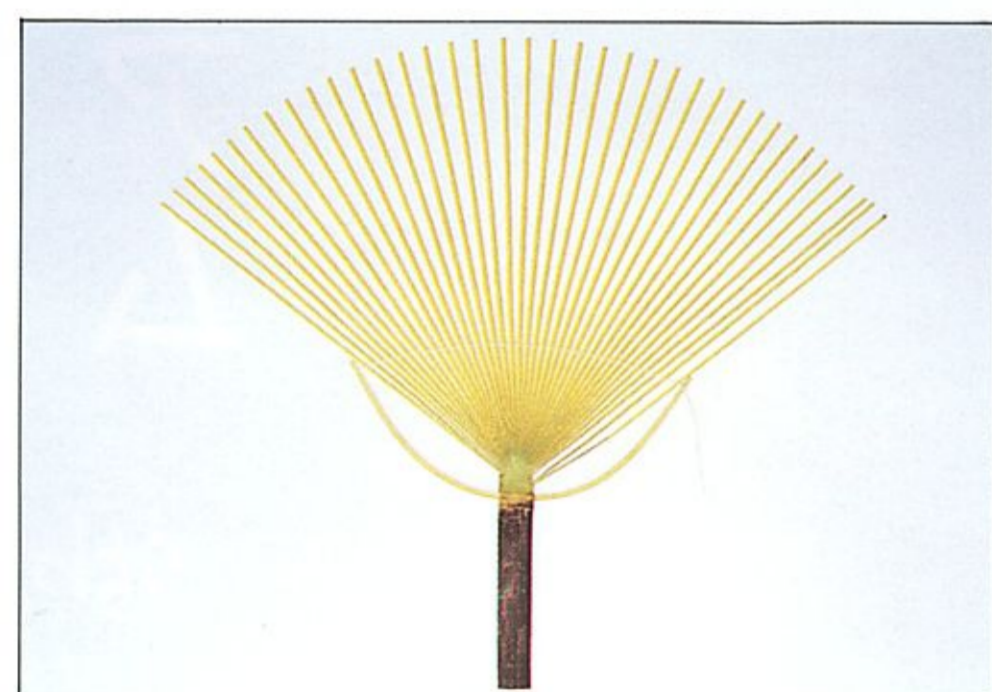
●うちわの骨のいろいろ



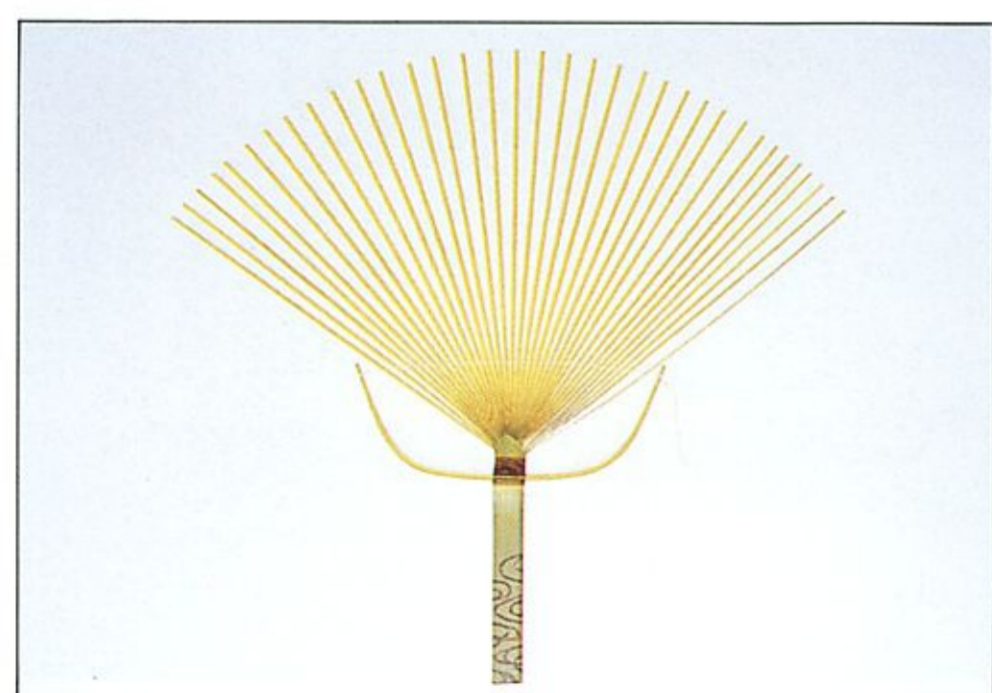
中満月



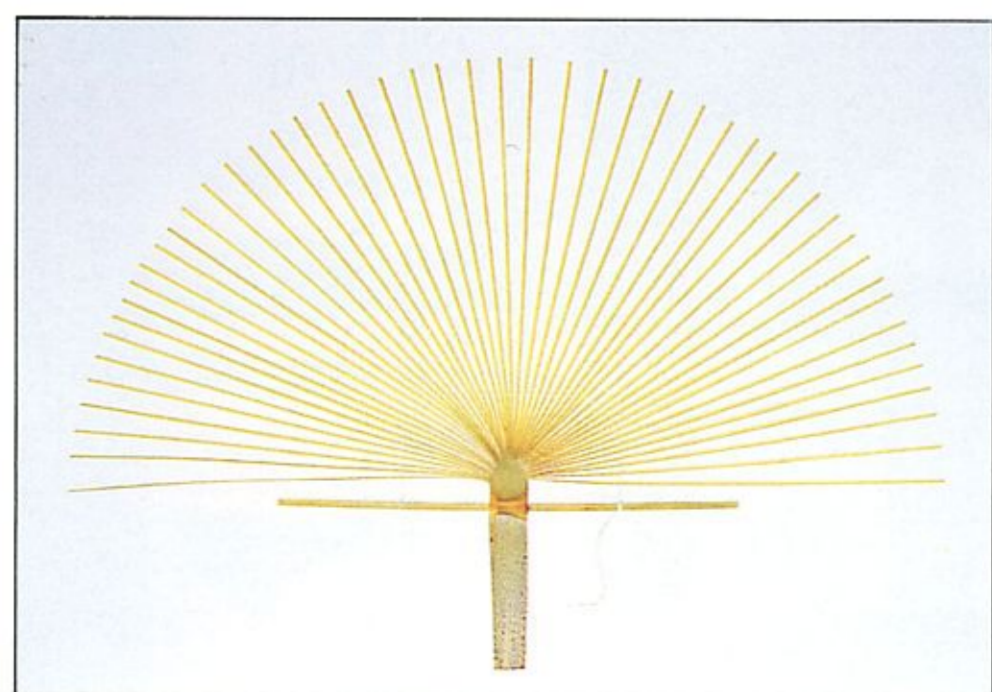
京丸



七八タキ



昭和



一文字

うちわの骨にはさまざまな形がある。今日では主に平柄はマダケ、丸柄はメダケを使い、すべて手仕事で仕上げる。どの骨も素朴な味わいの中に竹そのものの気品がにじむ。

●おもな工程



⑦貼立(はりたて) うちわ骨の穂の部分にのりをつけ、地紙を貼りつける。



⑧型切り うちわの種類に応じて、満月、玉子型などに穂を仕上げる。たたき鎌を当て、木づちでたたくため「たたき」とも呼ばれる作業である。



⑨へり取り うちわの周囲にへり紙と呼ばれる細長い紙を貼り、危なくないように仕上げていく。この後、鎌の両端に「みみ」を貼り、ローラーで圧搾して筋を入れると、丸亀うちわができる。



④柄削り 小刀で柄を削り、うちわの種類によっていろいろ加工を施す。柄の部分の仕上げに当たる工程である。



⑤編み 弓竹を通した穂を糸で編む作業。主に女性の仕事で、昔は子供も手伝っていたという。慣れた手付きで器用に編み、1日平均300～400本を編んでいる。



⑩付(つけ) 編んだうちわ骨の弓竹に形をつけ、編みのいびつさを直しながら、左右対称になるように糸をとじつける。昔は「付師」ともいわれた年季のいる作業である。



①木取り 素材の竹を平均40～45 cmに切断した管(くだ)をうちわに適した一定の幅に割る。まっすぐ割れる竹の性質を利用した技である。さらに内側の節を削り取る。この作業から手に持った時の心地よい感触が生まれる。



②割(わき) 「切り込み機」で穂先より約10 cmのところまで切り込みを入れる。穂の数は35～45本もあるが、同じ間隔でさいていく。目にも止まらぬ早業で、熟練した職人になると1日500～800本もこなしている。



③穴あけ 穴あけ用のきりを使って、鎌(弓竹)を通す穴を節の部分にあける。ここに通す鎌は別の職人の技でつくられる。

丸亀うちわのづくり

手づくりの温もりが伝わる

丸亀うちわづくりには、大きく分けて骨と貼りの工程があります。一つ一つの工程に、日本一の伝統を守る職人芸が光ります。何ともいえない温もりは、気の遠くなるような手作業から生まれます。一本のうちわができるまで、実に四十七にものぼる工程があるといわれますが、その一端を紹介しましょう。

うちわのすべてを

うちわの港ミュージアム

全国でも珍しいうちわの総合博物館「うちわの港ミュージアム」が丸亀港にあります。ここでは国の伝統的工芸品に指定された丸亀うちわの歴史、全国の有名うちわや貴重な文献などを展示しています。実演コーナーでは職人さんたちの伝統の技を見ることが出来ます。併せて、丸亀市特産の青木石、一貫張もご覧いただけます。入場は無料です。ごゆっくりお楽しみください。



■実演コーナー
丸亀うちわの神髄・竹骨うちわづくりの実演で、職人さんたちの伝統の技がご覧いただけます。



■うちわづくりの人形模型
うちわづくりの工程を細かい仕種の人形で再現したものです。



■展示コーナー
うちわに関する歴史的資料や全国の有名なうちわ、伝統工芸品の一貫張や讃岐広島青木石などを展示しています。



歴史と自然とアートが香る

うちわの里”丸亀”の風景

【丸亀城】

生駒親正が慶長二年（一五九七）から五年がかりで築き、築城の名手山崎家治公がほぼ現在の姿に完成させました。全国十二城にしかない木造天守閣や扇の勾配にも例えられる美しい石垣が自慢です。平成九年が築城四百年、ますます歴史ロマンが広がっています。



【丸亀市猪熊弦一郎現代美術館】

丸亀市が市制九十周年を記念して平成三年に建設した全国的にも珍しい駅前美術館。丸亀市にゆかりの深い洋画界の巨匠・猪熊弦一郎画伯から贈られた作品約千点を収蔵しています。



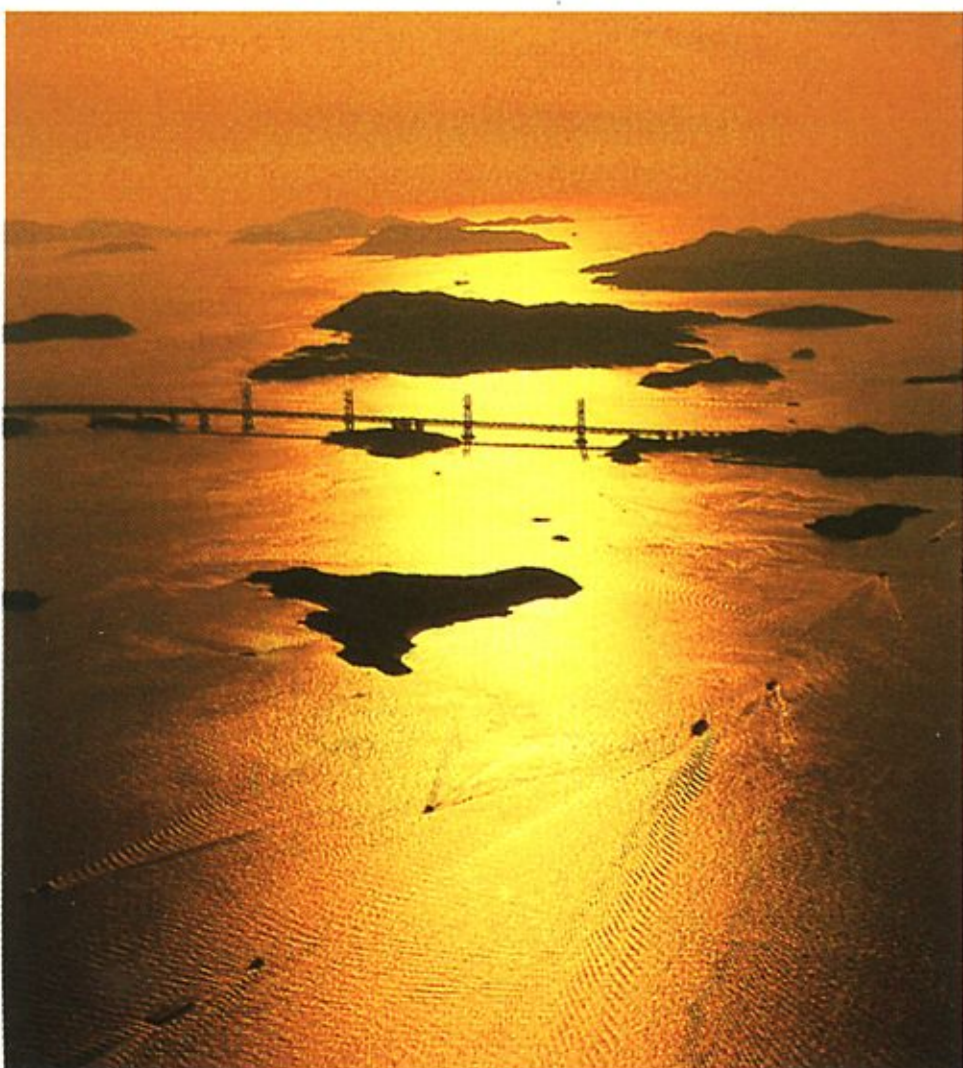
【中津万象園】

京極高豊公が築いた大名庭園で、高松市の栗林公園とも肩を並べる美しさです。園内に丸亀美術館があります。



【瀬戸内海と塩飽諸島】

丸亀市沖合に宝石のような二十八の島々が浮かび、瀬戸大橋から珠玉の風景が手に取るように見えます。



一貫張

使うほどに風趣を増す

うちわと並ぶ丸亀市の伝統工芸で、5代目万満庵一貫斎を名乗る西谷健さんただ一人が独特の技法を伝えています。和紙に古書を使うのが特徴で、下張り、中張り、仕上げと60枚も張り重ね、これに柿渋を塗り、乾燥させてはまた塗ります。製品は花器、花かご、銘々皿、盛りかご、小物入れなど素朴な生活雑器が中心で、使えば使うほど風合いを増すところに人気があります。すべて手作りのため、一つとして同じものはありません。



【飯野山】

標高四二二メートル。讃岐の山のシンボルとして、その秀麗な姿は讃岐富士の名で親しまれ、ふもとには特産の桃畑が広がり、花の季節はまさに桃源郷の趣です。



【NEWレオマワールド】

子どもから大人まで一日中楽しめる、四国最大の総合レジャーワールドです。香川初の直径五十メートルの大観覧車からは瀬戸内海を一望できます。





丸亀市